烏梅

叶 匠壽庵

2022年春 Vol.39

「白木蓮」

表紙絵作品

「白木蓮」

かわもとまりこ
河本万里子

日本画家。1975 年、滋賀県高島市生まれ。
嵯峨美術短期大学（現　嵯峨美術大学）日本画専攻科修了。
江戸時代の円山応挙より京都の画壇に受け継がれてきた『写意（写生を通して物事の本質をとらえる）』の伝統に学び、生命のもつ瑞々しさを四季折々の植物を通して描く。
京都嵯峨芸術大学非常勤講師を経て、現在大阪にて作家活動中。京都日本画家協会会員。

2003 平和堂財団芸術奨励賞
2005 青垣 日本画展 京都新聞社賞受賞
2006 前田青邨記念大賞展
2009 京都 日本画新展
2013 在マルセイユ日本国総領事館 - マルセイユ市 企画展 Parc Borély (France)
2015 叶 匠壽庵 寿長生の郷にて広報誌『烏梅』表紙絵原画展 / 河本万里子日本画展（同 ’18）
2016 第 4 回郷さくら美術館桜花賞展 桜花賞大賞受賞　郷さくら美術館東京
2017 河本万里子日本画展 - 春ノ譜 -　京都寺町 Art Space-MEISEI
2019 京都 日本画新展 in 二条城 -100 人の画家・嵯峨野線を旅して-
　　大丸心斎橋店 美術画廊にて個展
2020 日本画企画展《春興》京都寺町 Art Space-MEISEI
2021 大丸京都店　アートサロン ESPACE KYOTO にて個展
他　大覚寺蓮華殿　天井絵「花曼荼羅」、伏見稲荷大社 本宮祭行灯画奉納。

烏梅（うめ）――――――
近江も多く詠まれている『万葉集』。万葉仮名では梅を「烏梅」と表記されています。
近江の歴史と寿長生の郷（すないのさと）の梅林を重ね合わせ、タイトルとしました。

『烏梅』第39号2022年春
発行日　2022年2月1日
発行所　株式会社 叶 匠壽庵
発行人　芝田冬樹
編集人　池田典子
印刷所　佐川印刷株式会社
表紙・絵　河本万里子

株式会社 叶 匠壽庵
本社・工場
〒520-2266
滋賀県大津市大石龍門4丁目2番1号
TEL　0120-257310（土日祝休業）
FAX　077-546-3133
HP　https://kanou.com

『烏梅』は季刊誌として定期発行致します
定期購読お申し込み・スイートメモリー詳細については左記、もしくはお電話にて
https://kanou.com/gnaviplus/magazine

ミックス紙 FSC FSC® C022337

バイカオウレン｜撮影：丹澤愛継

まだ10代の頃、
学校帰りの駅で排気に揺れる花を見た
逞しいと思った

強く生きたいと思っていた
あの花のようにありたいと

あれから20年、
草花が生き生きと伸びる郷の風景に癒され
安らぎを覚えるものの、
不思議と未だにあの花が脳裏を掠める

少し勘違いしていたかもしれない
1人ではいけない
共に立ち、信じ合える仲間がたくさんいる方が
強いことだと、
今では郷の草花に憧れを抱く

田中知香（たなかちか）
平和堂石山店

近江の台所《その37》

朝宮茶

丹澤愛継（たんざわあつき）
叶匠壽庵グループ有限会社芝田果径

京都の宇治、静岡の川根と本山、埼玉の狭山と並び、日本五大銘茶に数えられる朝宮茶は、日本茶最古級の歴史を持つ。起源は１２００年前、唐から茶の種を持ち帰った最澄は、信楽町朝宮の風景に茶の故郷、天台山の姿を重ね、ここに種を蒔いた。

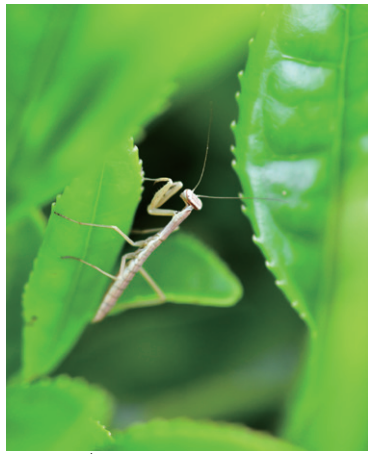
朝宮茶生産直売・かたぎ古香園六代目の片木明さんに各地のお茶の特徴を訊く。宇治は甘味、九州は旨味、と話す口調は、遠い人を想うかのように優しい。では、朝宮茶のセールスポイントは？

「香りやね。唯一、天下一品」

茶業界で朝宮茶を知らない人はいない。お茶人なら、「ああ、日本一高価なお茶ね」と返ってくる。しかし一般的には、「滋賀県でさえ知らない人はまだ多い」と片木さんは言う。この現状を変えたい、それが71歳の今も走り続ける片木さんの原点だ。もっと朝宮茶を知ってもらいたい。

それにしてもなぜ、これだけの歴史と実力を持つお茶が世間には知られずにいるのか。それは近接する宇治ブランドに吸収されるからだ。

深く険しい山間地、信楽町朝宮では、小規模な茶農家



茶畑初夏｜提供：かたぎ古香園

が多く、生産した茶葉の8割以上は宇治の茶問屋に渡る。高値で買い取られる朝宮の茶葉は、高級宇治茶の香り付け、いわばスパイスとして使われる。

かたぎ古香園の長男として生まれた片木さんは、大学を出て家業を継ぎ、改めて朝宮茶の実態に直面した。このままではいけない、と両親に理解を求め、早速直売に乗り出した。

平地・里の茶に対し、「山の茶」と呼ばれる朝宮の茶農家の仕事は過酷だ。訪れた茶畑の勾配は約22度あり、普段山で働く私でも足元はおぼつかない。茶葉の刈取り機を手にしてみたが、10分も持っていられるかという重さだ。数百kg単位で収穫した茶葉は、すぐさま地元の共同組合の加工場に持ち込み、乾燥状態の荒茶にする。問屋に卸すならここで一段落。1か月後には現金になるが、直売するにはここから各種、各ランクの製品に加工・包装し、それから在庫管理、施設機材への投資、と心身ともに休む間はない。

そうした努力は少しずつ実を結んでいった。「かたぎさんのお茶は美味しい」と、山中の小さな店まで買い求めに来てくれる人が増えてきた。

左　片木明さん(右)と隆友さん｜撮影：丹澤愛継
上　朝宮茶畑｜提供：かたぎ古香園

かたぎ古香園
●住　　所　〒529-1843
滋賀県甲賀市信楽町宮尻1090
●電話番号　0748-84-0135
●F A X　0748-84-0128

しかし、直売によって新たに直面したのが、農薬の恐ろしさだった。

茶の殺虫殺菌剤に含まれる成分は、人体から排泄されず骨髄に蓄積する。それを年に何度も施用する。毎日口にし、かつ農作物で唯一、洗浄を経ず食卓に上るお茶。畑、家、工場、随所で頭をよぎるのはお客さま、とりわけ小さな子どもや妊婦さんの顔。

当時、茶の無農薬生産は前例がなく、教えを乞う人もなかったが、1976年、26才の片木さんは2.7haすべての農薬を絶った。

辛抱の3年。畑は無残な姿となり、周辺農家からは苦情が出た。両親から恥ずかしいと責められながら、アルバイトで生計を立てる日々。変化が現れたのは4年目。救いの主はクモやテントウムシ、カマキリなど、害虫を食べる虫たちだった。以降、病虫害は出ても甚大な被害には至らなくなった。自然本来の生態系バランスが戻ったのだ。それから今日まで、美味しさと品質の追及も加わり、面積あたりの収量は一般的な農法の70％程に減ったが、このサイクルを壊してまで生産性を上げようとは思わない。

片木さんはいま、各地で無農薬茶栽培の普及に努めている。今回、こうした活動への風当たりが強いことも改めて知った。事実を語れば他業者の否定にもなりかねず、テレビや新聞など影響の大きいマスコミへの出演や取材は控えているという。それでも同志はいる。今では朝宮の茶農家の15軒ほどが無農薬を実践している。そしてなにより、頼もしい7代目、息子の隆友さんがいる。

隆友さんは農作業の傍ら、紅茶の開発・販売促進と、緑茶の海外への販路開拓に取り組んでいる。日本より農薬規制の厳しい欧州などでは、図らずもかたぎ古香園は優位だ。後継への迷いはなかったか訊ねると、「なかったですね、こういう農法でなければ継がなかっただろうけど。これはやっていかないといけないことだから」。

朝宮茶1200年。これまで苦しい時代や局面は何度もあり、その度に、あたらしい人の知恵と力が注がれてきたのだと思う。

お茶をいただく。作ってくれた人の顔が思い浮かぶ。美味しいとは、美しいなのだと思う。

※注　市販のお茶はすべて、農林水産省の基準に沿って栽培されています。

スイートホーム

西田恵理
主婦

サラリーマンが一生で1番大きな買い物をするといえば「家を買うこと」だ。我が家も子どもたちが幼稚園に行く頃、社宅が手狭になって夢のマイホームを購入した。男の子2人は田舎の一軒家でのびのび育ち、時に喧嘩して泣いて帰ってきたり、思春期には部屋から出てこなかったり、実にたくさんの思い出が詰まった家だった。

月日が流れ、コツコツとまじめに働いてきた夫がとうとう30年の住宅ローンを完済する日が来た。今まで元気で働けたこと、夫婦で節約しながら頑張ったこと、たくさんの感謝を込めてその日にレストランを予約した。

銀座にある素敵なフレンチレストラン。コース料理が終わっていよいよデザートが運ばれてきた。蝋燭の光に照らされてケーキやソルベ、フルーツとソースがアートのように彩られ、白いプレートの縁には『家のローン完済おめでとう！』の文字。さらにお店の演出でお皿の上にはもう1つチョコレートのドームが乗せられている。ニコニコしたシェフが上から熱々のチョコレートを掛けると、なんと扉が開いたように中から『スイートホーム』と書かれたホワイトチョコレートが現れた。まさに私たちの家だ。

「大事で素敵な記念日ですね」と真心のこもったメッセージをもらい後にした帰り道。明るい月が私たちを家までずっと照らしてくれた。

にしだえり
1964年、滋賀県に生まれる。こよなく音楽とスイーツを愛し、お菓子を題材にした歌も多数作曲する。ピアノ教師の傍らフードバンクでボランティア活動中。

※このページへの投稿を募集しています。投稿につきましては、裏表紙をご覧ください。

近江の街道史話《その7》

東海道水口宿～快力娘大井子の水口石

やすぎじゅん
八杉淳
草津市立草津宿街道交流館長

歌川広重をはじめ多くの絵師たちが東海道五十三次のシリーズで各宿場を描く。各宿の画題は、街道の風景はもとより、絵師それぞれの興味や関心によってさまざまなものが取り上げられている。歌川広重は「東海道五十三次水口」(保永堂版)で、このあたりの名物であった干瓢を干す光景を、このほかの版では木賃宿や旅籠の光景、石部宿(滋賀県湖南市)との間にある名勝平松山の麓にあるうつくし松などを描く。葛飾北斎はところてんを売る店を画題とする。歌川国芳は、歌川豊国、広重との合作で、弘化年間(1844～47)に「東海道五十三対」のシリーズを世に出した。このシリーズでは、画面に宿場に因んだ説話などを取り上げ、上部に詞書を入れて説話に纏わる人物や風景と一対にしたことから「五十三対」と題され、水口宿(滋賀県甲賀市)では詞書に快力娘大井子と水口石の水争いの説話と大井子をモデルにした女性、その背後に水争いの景を配している。

高島(滋賀県高島市)というところに大井子という大力の女性がいた。力があることを恥じて普段は力を出さ

歌川国芳「東海道五十三対　水口」
｜草津市蔵・中神コレクション

の題材としたのは、水争いにかかわるもので、田へ水を引く「水口」に因んで、宿場名であった水口になぞらえたと考えられる。

なお、この説話は合力者として名高い近江海津（高島市）の遊女、近江のお金の説話に類似したもので、大井子が動かしたとされる水口石と呼ばれる大石が、いまも高島市安曇川町三尾里にある安閑神社境内に残されている。

そもそも、この説話は、建長6年（1254）の『古今著聞集』巻第十「佐伯氏長強力の女大井子に遇ふ事」にみえており、水争いの話には次のような前段がある。

佐伯氏長という力士が、初めて「相撲の節会」に召されて、越前から京都へ向かう途中のことであった。近江高島の石橋を渡ったとき、娘が川の水を桶に汲んで運んでいるのに出会った。氏長は馬から降りて娘の腕に触れると、娘は氏長の手を脇に挟み込んだ。その力は強くまったく抜ける気配がない。そのまま娘の家に着くと、娘は氏長に何者かと尋ねた。氏長は越前の者で、選ばれて宮中の相撲大会に行くところだと答えた。娘に都には

ず、農業の合間に馬を牽き、旅人を乗せて生業としていた。あるとき、大井子と村人が田へ引く水を巡って口論となり、大井子の田に水を配らなかったことで、大井子は夜の間に6、7尺四方の大石を持ってきて取水口におき、自分の田にのみ水が入るようにした。夜が明けて村人は驚いて、数人がかりでその大石を動かそうとしたが、全く動く気配はなく、大井子に許しを請い、大井子の合力によって大石が取り除かれて水争いが収まったと詞書に記されている。国芳がこれを「東海道五十三対」水口

安閑神社の水口石（右）〔高島市安曇川町三尾里〕

もっと大力がいるので、ここでもう少し力をつけていくとよいといわれ、逗留することとした。娘は強飯を炊いて握り飯として氏長に食べさせたが、あまりにも堅く握ってあるので、最初は全く歯が立たなかった。しかし、7日くらい経つと堅い握り飯がようやく食い割れるようになり、最後には余裕をもって食べることができた。氏長は、娘が怪力で握った握り飯を食い割れるようになる力をつけて京へと向かったという。この後段に、先の水争いの説話が続くのである。

また、歌川国芳は『木曾街道六十九次之内』の岩村田宿（長野県佐久市）でも大井子の説話を取り上げている。大井子の説話と「岩村田」とのかかわりは、「岩を村の田」から退けた大井子という繋がりから題材として描いたと考えられているが定かではない。

この説話は、歌舞伎の舞台で演じられる舞踊の所作事としても知られる。近江のお金の強力ぶりを主題とした「晒女」、別名「近江のお金」で、二世桜田治助が作詞、四世杵屋六三郎の作曲。文化10年（1813）6月に江戸森田座で市川団十郎が初演。近江八景になぞらえた八変化もの「閏茲姿八景」の一節で、盥を持った大力女お金が暴れ馬を抑えるところから始まり、盆踊り、鼓歌を経て布晒で終わる怪力娘を題材とした作品である。

八杉淳
専攻は近世交通史。江戸時代の街道を歩きながら実践研究。現在、草津市立草津宿街道交流館長、兼史跡草津宿本陣館長。

よそはよそ、うちはうち。

河原林麗菜（かわらばやしれな）
営業部通販課

先日、ＳＮＳで同級生を見つけた。懐かしい気持ちと、どうしているのかなと、期待を込めてその投稿を見た。そこには「結婚しました」の文字。驚きと嬉しさが同時に押し寄せた。まさかこんなタイミングで知るとは。

投稿はいたってシンプルだったが、リアクションやコメント欄は祝福の言葉で溢れていた。その中には別の同級生が。なるほど、こうしてつながっていくのかと感心しながらも、その人のプロフィールを見た。なんとアメリカに住んでいるではないか。情報過多で私は一旦携帯の画面を閉じた。知らないうちに、周りはどんどん変わっていっている。驚きと、尊敬と、そして少しばかりの落ち込みを感じた。自分はちゃんとした道を歩めているのだろうか。つい人と比べてしまう自分に嫌気が差した。隣の芝生は青く見える、とはよく言ったもので、憧れて真似しようとしてもその人にはなれない。自分なりに満たされていても、欲張ってしまう。

情報の荒波にのまれた私が、流れ着いた岸で思ったこと。何をやってきたか、よりも何がこれからできるか。そしてそのために今、始められることは？自分はどうしたいのか？ということ。足元の芝生から目線を上げて遠く先を見て生きていきたい。ちゃんとした道を歩めているのだと、胸を張って自分自身を褒めてあげられるように。

ふるさと絵屏風（記憶絵）でつながる未来《その7》

完成に向けて、そして昔の娯楽を再び

池田典子（いけだのりこ）
本誌編集人

嘉田由紀子（かだゆきこ）
監修　環境社会学者、前滋賀県知事

「よいと　よいやまか　どっこいさのせ～」の囃子言葉。歌詞や節回しは地域や流派によって様々だそうだが、滋賀県を中心に近畿地方各地で盆踊りに用いられる「江州音頭（ごうしゅう）」を皆さんご存知だろうか。

滋賀県で生まれ育った私には、夏には町内で祭りが開催され、昼は神輿を担ぎ、夜は「江州音頭」で、浴衣を着た町内の人々が集って櫓の周りを踊ることが定番だったのだが、最近はそうでもなくなってきた、らしい。らしいと付け加えたのは、記憶絵の聞き取りでご年配の方たちの口から出てきたこの盆踊りを「知らない」という20代のスタッフがいたからである。

知らない、と聞いて改めて考えてみると、確かに今、盆踊りを踊ることがないことに気付いた。そしてそれはいつからだったのだろうと、記憶を辿ってみる。最後に踊ったのは……。いつだか思い出せない。大人になってから参加したことがないのかもしれない。参加どころか、見かけることも残念ながらほぼない。強いていうなら映像や過去の写真でだろうか。

そんなことを話しつつ、記憶絵はいよいよ大詰め。色を塗る作業も、日毎に細かくなってくる。こだわればこだわるほど完成度も高くなるのだが、完成の目標は初春。2月24日の龍門町ふれあいサロン「オアシス」での発表だ。表具にする時間も考えるともう日がない。この原稿を皆さんが読まれている頃には、表具屋さんの手に渡っているはずだ。指導をしていただいている河﨑さん、龍門の絵の先生である半田さんを中心に、地域の皆さんが少しずつではあるが塗り進め、その後輪郭をペンでなぞっていく。ペン入れすると、くっきりと浮き上がり、少しでも完成に近づいた感じがして、嬉しくなる。畳2枚分くらいの大きな紙が、空白スペースも少なくなり随分賑やかになってきた。更に埋めていくので、年末ギリギリまで取り組む。年末年始の多用な中、参加してくださる地域の方々には感謝しかない。

それと並行して進めているのは、その細かいシーンの写真を撮り、拡大して紙芝居のように語れる道具づくりである。記憶絵自体は大きいのだが、1つひとつは小さく描かれているので、見やすく、そして説明しやすくするためだ。この絵が完成した、というだけで終わるのではなく、これから楽しく語り継いでいくことが重要だと考えている。

そしてもう1つ。この記憶絵の中心近くに描く八幡神社で行われていた江州音頭の様子を、この龍門で再現しようと寿長生の郷のスタッフが立ち上がった。恒例の「花の宴　梅まつり」の中で、記憶絵の完成披露会と合わせて実施したいと計画中である。こちらは、滋賀県江州音頭協会さんの協力を得る予定だ。

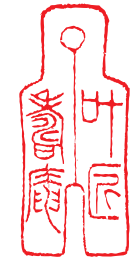
今も八幡神社では例祭として9月に「草木祭」があるが、昔は村人の娯楽の機会を作ろうと青年団や婦人部が中心となって企画をし、盆踊りをしていたそうだ。そこで初めて聞いた「棚音頭」と「座敷音頭」。そして「桜川一門」に音頭取り（櫓に立ち唄う、今でいうリードボーカル）を依頼していた、ということ。江州音頭の歴史には長くなるのでここでは触れないが、知らないだけで奥が深いということに気付く。

よく知られる櫓の周りに輪になって踊る盆踊りは、棚音頭。そして次の日に行われるのが座敷音頭。浪曲のような語りを中心とした、聴かせる江州音頭だそうで、泣きあり、笑いあり。当時はテレビもなかったので、その昔の物語を聴くのが楽しみだったそうだ。記憶では、昭和37年（1962年）にはなかったということだが、テレビが急速に普及したのが昭和34年頃と言われているので、やはりこれが実施されなくなった一因なのだろうか。ここにも時代の変遷が垣間見える。

現時点ではまだ完成していないが、この記憶絵活動の約2年間は、コロナ禍という大きな壁がある中での作業で、気を回さなければならないことも多く計画どおりにはいかなかった。しかし、河﨑さん、半田さんはじめ、多くの方々に参加していただき、ここまで進められたことに改めてここで謝意を表したい。

絵の完成はゴールではなく、どう活かすかという意味ではスタートである。本来なら聞き取りした資料も同時にまとめあげられていることがベストであった。それは宿題として残すことになったが、記憶絵の活動は、寿長生の郷で江州音頭を行うきっかけとなった。更にこれからは、地元小学校や地区の文化祭で、龍門ならではの記憶絵を披露し、営まれていた暮らしを語り継ぐ良い教材となるに違いない。今後どのような風景そして文化を作っていくか、未来を見据えた活動につなげたい。

座敷音頭の様子（昭和56年頃）｜写真提供：滋賀県江州音頭協会



地上の稲を結実させる稲妻（夫）。それは、豊穣をもたらせるものでもあります。自然が織りなすこの世界を、人は鋤・鍬をもって耕し、新しい道を切り開くために創造力を働かせます。叶匠壽庵人は「農工ひとつ」を合言葉に、百姓（おおみたから）として菓子づくりに接し、先を見据えたモノづくりを考えます。この印は1つひとつの命を大切にし、その持つ力を最大に発揮させ、生かしていく能力を拓いていくという意志を表現しています。

今年の立春は2月4日です。これから、春本番。寿長生の郷では福寿草やオオイヌノフグリが顔を出し始めます。そして間もなく郷一面に千本の白梅が咲き誇り、歩いているだけで春の香りを漂わせてくれます。一足早く、季節の風味を楽しみたくなって花見団子風にお菓子にしてみました。百合根、いちご、蓬、桜餅、わらび、小豆、うぐいす豆、梅、筍などの郷の恵みを竹串と共に盛り付けてみると春爛漫のごちそうができ上がりました。里山の便りを紙面よりお届けいたします。

叶匠壽庵

写真撮影　谷口菜穂子